

コンケン大学での居候生活 (27)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

在職時、それも大学に赴任してかなり早い時期の助手の時代に、米国で開催の国際学会に出席して論文発表したときのことである。初めての国際学会参加出席でもあり、詳細が分からず、また発表に用いる資料も、どの様に準備して行けば良いのかも、もちろん分からない。ただその時に分かっていたことは、普通の口頭発表ではなく、今言うポスターセッション形式の発表で、割り当てられた面積の壁」に発表者が必要とする資料を貼り付け、その前で1時間ほど立ち続け、参加者が質問に来るのを待ち受けると言うものである。何しろはじめての事であるから、どの様な資料を用意して張り出したら良いか戸惑いと、不安もあったが、それらの準備は米国に行ってから準備することにしようと思いを決めて出発した。と言うのも米国旅行はこの学会出席を含め2ヶ月を予定していたからである。このときの米国行きは筆者にとって初めての旅行ではなく大学4年生の時に、幸運にも50日間米国を訪問する機会を得ていたため、ほぼ10年後の再訪問と言うことであった。幸にも10年前の訪問時にお世話になった各地の知人を一人一人訪ね、学会の開催地であるミシガン州に辿り着いた、また大学に赴任してから5年ほど経過していたから、筆者が所属する学科がミシガン州立大学の農業工学科と学科間の交流を始めており、双方の学科の2、3の教授が相互訪問を終えていたこともあって、その時にお世話になった教授が、ミシガンに来る予定があれば連絡せよと言うことで、ここぞと言わんばかりに連絡を取った。ミシガン州のデトロイトでの国際学会までの1週間、また国際学会を終えてからの3、4日間、その教授には大変お世話になった。どの様にお世話になったかと言うと、近辺の農家や公共の施設、例えば市内の博物館や教授の所有する別荘など広い範囲に足を伸ばし、見学、案内して頂いた。また国際学会が始まる2日ほど前には、教授自らがデトロイトのホテルまで筆者を送って頂いた。翌日は米国の大手企業の訪問を予定していたが、これもミシガン州立大学に滞在中に、その教授が電話で当日の世話人が誰かを確認し、予定をアレンジして頂いた。それだけにとどまらず。教授の次男夫婦がデトロイトに居るので、彼に明後日の朝迎えに来させるので逢いなさい、そうすれば彼が、エジソンやヘンリーフォードの偉業を納めたグリーン・フィールド博物館まで連れて行ってくれる、と言う。その次男夫婦には既に顔見知りであったから、翌朝指定の時間にホテルのロビーで待っていると彼が来て「車に乗れ、今日は1日中つきあえないので博物館まで送ってやる。広いから見終わるまでに1日ほどかかるであろう。夕刻迎えに来るからそれまで楽しめ」と言う。当時その博物館で目にした日本の技術は、イギリスのマン島で優勝したホンダのバイクと新幹線の台車のカットモデルであった。これらは今でも日本が誇る輝かしい技術である事には変わりはないが、誇らしい思いをしたのを今でも覚えている。

そして、国際学会の当日会場に出向き、初めての雰囲気味わう。ポスターセッションでは割り当てられたブースの壁に米国で準備した資料を貼り付け、参加者の来訪を待った。苦痛(?)とも思える1時間の持ち時間が過ぎ、ホットする気分を味わった。日本からは院時代の有人と指導教員である教授も同じ学会に参加されていたので会期中は行動を共にした。五大湖があり、カナダとの国境に近い所に工科大学があり、林業機械やオフロード車両のデモや見学会、晚餐会があり、5日間ほどの行事を消化し、帰宅の途についた。と言っても筆者はこの学会の前後に、まだ訪れるべき大学や研究機関、企業などがあったので当然のことながら上記した教授や有人とは分かれ、再びお世話になっていたミシガン州立大学の先生の所に戻ることで予めお願いしておいた。デトロイトからランシングを通りミシガン州立大学のあるイーストランシングに辿り着く。途中バスの中でドイツの大学の先生と知り合い、その後も連絡はあったがソ連の崩壊で東西ドイツが統一されてから、連絡は途絶えた。もともと教授は西側陣営の人であったが、ベルリンが東西に分割されてから固有資産は没収され、ベルリンの将来に希望を持たなくなったことで、教授の子供達は全て米国や他国に送り出していたのであるが、東西ドイツの統一で私有財産も戻ってきたらしい。このドイツの先生には、その月の下旬にカリフォルニア大学で開催の米国農業工学会でも会うことができた。カリフォルニア大学では、筆者が会うことになって居た教授がその「ドイツの先生の知人でもあったので、急に2人の距離が近くなった。話しは少し横道にそれるが、良い機会なのでこのときの話しを敢えてここで紹介し、交流の良さ、人を知ることの重要性、仕事に於ける人を知る上での必要性、などが参考になればと言う観点からここに記述する。このときの旅行でドイツのベルリンからの教授と知り合ったが、ミシガン大学に戻ってから、間もなく後半の旅が残っており、イーストランシングからジョージア州のアトランタを経てアラバマ州の国立耕うん研究所を訪れる予定になっていた。この時代には、空港を出発する日の72時間前に自分の搭乗する飛行機に自分の名前があるかどうかを確認するリコンファーマーション(再確認)という手続きが必要であった。その手続きを終えてミシガンを後にしたが、ひとつ心配なことがあった。ミシガン大学に到着してから次の訪問先であるアラバマの研究所での受け入れホストに連絡がしてなかったので、果たして空港に迎えに来てくれるかどうか心配であった。しかし、運良くと言うか、空港に到着して荷物を受け取り外に出ると、一人の紳士が「伊藤さんですか」と声を掛けてくれた。と言うわけで後は彼の車でホテルに向かい4, 5日滞在したかと記憶する。関係の学会誌などで名前を知る他の人をも知ることができ、わざわざ初めてであると言うのに家にまで招待して頂いたり、楽しい思いを今も覚えている。別れの日が来て、そのホストに空港まで送って貰う。空港までは時間的、距離的には結構あり、いささか申し訳なかったが「大丈夫、送ってやる」ということで気前よく送って頂いた。さてアラバマから西海岸のロスアンゼルスを経由してサクラメントまで飛び、上述した米国農業工学会に出るという予定になっていた。空港には上記した学科間の交流で三重大学を訪れた教授が迎えに来てくれることになって居た。しかしトラブルが起きた。最終到着地であるサクラメ

ントの空港に着いたのが夜 10 時で、荷物を取りに行くと見当たらず、永らく探し回り、殆どの荷物が次々と他の乗客により運び出される中、自分の荷物が一向に見当たらない。そこで事務所に行き、そのことを告げた。「ひょっとすると、まだアラバマにあるのでは……」などと係官は冗談を言っていたが、いずれにしてもスーツ・ケースの特徴、色、大きさ、外観などを事細かに告げると、「明日貴方の投宿しているホテルに届ける」と言う事で荷物については問題は解決した、しかし既に真夜中の 12 時を回り、空港内の人の数も殆ど無くなっていた。迎えに来てくれると考えて居た教授の姿は見当たらない。ひょっとすると荷物の紛失で手続きが長くかかったのが、迎えに来てはくれたが姿が見えず、諦めて帰ったのではとの思いもあったが、空港に何時までも居るわけには行かないので、意を決してタクシーで学会が開催される会場に向かった。大学の寮がそのホテルに当てられて居たからである。学会の登録受け付けデスクを見つけたが、当然のことながら既に深夜だから人っ子一人居ない。何処に行けば良いかわからぬまま、いたずらに時間だけが過ぎていく。「緊急時はここに連絡をせよ」との張り紙があったが、余りにも遅いので迷惑がかかるのではないかと余計な心配も働き、結局、筆者がとった武勇伝のひとつとも言うべき対応は長椅子を 2 つほど集め、掲示板の前で「一夜を明かす」ということであった。翌朝目が覚めると多くの人が登録デスクの掲示板に集まっていたが、ふと見ると、迎えに来てくれる予定の教授が自分の前に立って居るではないか。迎えに来てくれたかどうかは分からないが「ここに来るのに問題は無かったか？」と聞くので「全く問題は無いと嘘を言ってやり過ぎた。登録開始の時間が来てホテルとなる寮の部屋がわかった。ひとまずその教授とは別れて自分に割り当てられた部屋に行き、しばし休憩したあと外をぶらりと歩いていると、デトロイト、ミシガン大学で知り合ったベルリンの先生にばったり会った。「また逢えて良かった、まあ私の部屋に入れ」と言うことで、言われるがままに従い、しばし話しをしたが、その時昨夜の空港での荷物に関する話しをした。そんなわけで荷物は届いていないので、ひげを剃ることもできないし、着替えもない、等と言っていると「実は此方の教授から朝食をどうかと言う事で招待されている、おまえも一緒に来たらどうか」という。と言うわけで 2 人で朝食のホスト先の教授の家に出向く。驚いたことに、その教授が、自分を迎えに来てくれる予定であった教授であり、あらためて 3 人での話に花が咲いた。昨夜のことは何処吹く風と言う姿勢で臨んでいたから気にもしていなかったが、ベルリンからの先生がその一部始終を話したようで、朝食後家を離れる時の 1, 2 分間、「昨夜は大変だったと聞いた、迷惑を掛けて申し訳なかった」と流石に紳士らしく詫びを言ってくれた。と言うわけでいろいろあったが学会での滞在期間中は大いに参加を楽しんだ。また三重大学での農業機械学科とミシガン州立大学の農業工学との学科間交流とは別に、この学会のホストであるカリフォルニア大学からの訪問者の一人が日本に来られ、1 週間ほどの滞在期間中に、企業や大学訪問に同行し、お世話をしたことで長期の関係を維持することになった教授の一人は、筆者が定年退職後にチェンマイ大学に客員教授として招聘を受けたときにも逢うことができた。その先生もチェンマイ大学のポスト・ハーベスト研究センターに 3

ヶ月ほど客員教授として滞在されていたからである。その先生はもともとタイ人であるが若いときに米国に移住し、筆者が米国の2つの学会に参加する前の年(?)に日本に来られ、企業、大学を案内した記憶がある。学会期間中に会う機会は逢ったが、渡米するまで、及び渡米してからもその先生については頭の中の記憶になかった。しかし驚きと嬉しさが一度に溢れてきた。また、学会が終わり、帰途に着くとき有名で名が知れていた重鎮的存在の先生が、「貴方が此方に来るときは大変だったと聞いている、迷惑を掛けた」と言って、帰りのバスのチケットを差し出し「わずかだが、これを使え」と渡してくれた。こうした控えめで目に見えない仕草や対応が、本当のマインドであり、管理職に着く人には特に必要、かつ重要である。特に一過性の対応でなく持続可能な、将来を見据えた関係構築には不可欠の条項である。

話が随分と長く横道にそれたが、本来のトピックに話しを戻そう。いささか話しが込み入り、理解も容易でないかと思われるが、その後十数年も経て、中国で開催の別の国際学会で筆者と同じように招待され、基調講演者として招かれて来たオランダからの先生を知ることになった。この時の学会では筆者が学生時代に訪れた時の米国の大学の学長を知る招聘基調講演者にも逢うことができ、遠い昔の話しに花が咲いた事も記憶しているが、ここではそのオランダからの先生の話をする。オランダと言うから、てっきりオランダ人かと思っていたので、オランダ語はドイツ語によく似ていて、ほんのわずかしが違わないと聞いているが・・・などと話をしているうちに、その人は自分もともとドイツ人だがオランダに移り住んだのだと言う。そこで、実は私はドイツの大学の先生(教授)を知っているが、永らく連絡が無く、特に東西ドイツが統一されてからも連絡先がわからず、そのままになって居ると言う、折り返し「その先生は何処の大学の先生で名前は何と言うか?」というので、大学名と教授の名前を言うと「それは私の指導教授だ」と言う。実はここで言う指導教授は筆者が米国のミシガン州立大学、デトロイトでの国際学会を通じて知り合ったベルリンの教授なのである。そこで「その先生は今どうしているか」と尋ねると「東西統一後、彼の私有財産は彼に戻され、元に戻った」と言うことであつた。重ねて「連絡先は分かるか、できれば知りたいので教えてくれ」と言うと、その教授の「メールアドレス」を教えてくれた。帰国後早速メールしたが、返事はなく、しばらくして航空便で写真が同封されて届いた。「何故メールでなく、航空便なのだ」と怪訝に思ったが経た年月の長さがいろいろな変化を人間に与えてきたのであろうと思い、余計な探索はしないようにした。わざわざヨーロッパに行かなくても、アメリカに行けばヨーロッパの人にも会え、また知り合うこともできる、と感じたのはその時からである。

ここまでは本報の本筋ではなく余談であるが、このときの米国研修旅行はデトロイトでの国際学会とカリフォルニアでの米国農業工学会の2つの学会に出席・参加するのが「主目的」であり、そのついでに道中のいくつかの大学や企業、政府の機関を訪ねると言う長丁場の度であり、期間も2ヶ月と学生時代のものより10日ほど長い旅であつた。日本に帰国して2ヶ月ほどした頃、海外からの郵便が多く成った。内容は米国の国際学会で発表し

た研究論文についての質問や更なる情報提供、意見交換を求めるもので、あらためて国際学会での発表が「如何に速い速度で世界中に広がり、多くの関係者の目にとまるか」と言う事に気づき、また驚かされたものである。時は経ち、不幸にして長期に亘るコロナ禍で移動が制限され、不自由な状況の下であればこそ情報化（機器）の進展、発達が世界の国々の距離を小さくしていることを直感させる。論文は研究の詳細な内容を記したもので、必要、かつ重要なものである事に変わりはないが、理解するには時間がかかる。いち早く研究内容を把握、理解するにはビデオが手っ取り早い。あとで詳細に論文に目を通すとしても、とりあえず「何を言っているのか、何を言わんとしているのか、何を対象にした研究なのか」などを手っ取り早く、かいつまんで読み取ることができる。論文は一見しただけでは内容を素早く派臆する事は出来ないがビデオを用いたプレゼンを見るだけで全体が把握できる利点がある。また決められた制限時間内で発表をオンタイムに終わらせるために、予め録画したものを用意し、プログラムが遅延する事への対応としておけば、進行もスムーズである。国際学会に限らず、その他の学術的イベントを含めビデオを用いた発表が大きな効果を持つことが再認識される。また記録として残すことができるから、何度でも見聞することができ、確認や修正、さらなる改良などにも資料としての価値を持つ。ユーチューブ、SNSが急減期に増加拡大普及し、社会的に受容されるようになって、それが持つ力の大きさ、社会に与えるインパクトの大きさに驚かされる。それだけに利点ばかりではなく、欠点もある事を十分に注意しなくてはならない。大学の講義、一般の講演会での講演などにおいて、上記の様な利点がある事は理解できるが、他方では記録、証拠物件（資料）にもなり得るから、うかつに不用意な表現を残しておくことは、それこそ不必要なもめ事の種にも成りかねない。ビデオ資料、教材は記録にとどまらず、何か不都合なことが生じると、いわゆる重要な「証拠」にもなり得るので気を付けなければならない。講義資料や教材と言えども、何処でどの様な形で引用されたり、利用されるかは分からない。都合のよいところだけを切り貼りして、勝手な判断材料として利用されるとも限らない。しかしビデオ録画した資料のもっとも大きなメリットは、時間や場所に、また幸にも制限されずに、好きなときに好きなだけ、何処でも視聴できることであり、論文は文字を読んで考えたあげくに記憶をまとめて理解にするまでの過程が長く、その分だけ反応も遅れる。しかしビデオではそうした時間と手間を掛けずに、すぐさま結論までたどり着く事が出来る。最近の国際学会の開催に関するアナウンスメントの拡散を引き受け、結果として多くの参加者（実際は一人の参加者も応募させることができなかつたが）を呼び込めなかつた、「ふがいなさ」とその責任感に堪えかねて、お詫びをして、言い訳として自分が行っている研究分野をビデオ収録したもので説明したことが、素早い反応を引き起こし、基調講演かチュートリアルセッションでの話題提供にと招かれたことは前々報でも既に紹介した。「素早い理解に基づく反応」即座に受けることが出来るのもビデオ教材の利点であり強みでもある。国内での学会での発表論文は日本語、あるいはその国の言葉であるから国際的に慈雨報が拡散されるには時間がかかる。しかし近年では英語というグローバル言語を

操ることができれば情報は瞬く間に世界的に拡散され、反応も極めて迅速である。博士課程での学位取得に国際学会での発表、国際的学術誌での掲載が条件となる所以でもある。コロナ禍は数百万にも迫る数の人間の命を奪い（2021年8月現在）、貧困と富裕との格差を助長したが、情報化技術が人類の距離を狭めたことも事実である。かといって相互に理解が進んだかという一概には言えない。今まで知らなかった相手との関係、考え方、思想などをあらためて認識、あるいは再発見する機会にもなった。残念ながら、こうした状況にあって人類が仲良くするのではなく、より一層敵対し、あわや戦争になるのではと思われるきわどい位置にあることを垣間見ると、何故そこまでして「我欲」を押し通そうとするのか、理解に苦しむ。本当に愚かな行為である。

本報ではいろいろと話題が入り組み、何を言わんとしているのか理解が十分にできないと言う指摘もあろうかと思うので、ここで言わんとするところを明瞭に要約しておく。

- 1) 米国は強固な大国で、政治、経済、外交、科学技術などの分野で世界をリードしている。
- 2) 自国優先が表面、あるいは前面に出て、時には反米感情が吹き出す例も少なくないが、世界をリードしている国である事は事実である。
- 3) 語学研修などで日本の大学生が夏期休暇を利用して英語研修に参加するが、その数はべらぼうに多い。語学のみならずアメリカという国を知る上でも意味がある。英語だけならオーストラリアやニュージーランドでも良いからである。しかし語学研修と称するこの種のプログラムは企画する大学に取っての教育ビジネスであり、筆者らが立ち上げ、実施してきたプログラム（3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム）とは大きく異なる。もちろん、プログラム自身が一方は語学研修であり、他方は研究要素が多いと言う基本的相違もあるが・・・。
- 4) 米国にはヨーロッパやその他の地域からの来訪者が多い、何事も中心であるからこそ、また魅力があるからこそ、集まるのである。ヨーロッパに行かなくてもアメリカでヨーロッパの人を知り、有人になる事が次期のヨーロッパとの交流事業へのステップにもなる。
- 5) 学術研究論文を米国での学会で発表すると多くの国からの藩王が迅速に届く。
- 6) 多くの異なる人種が形成する移民国家であるが家に、国家への忠誠、義務、愛国心を育む協調性、誇りが基本的に醸成されている。
- 7) 多くの民族が居住する多民族国家でもあるが、それに類する他国とは大きな違いがある。
- 8) 情報化技術の進展により人間相互の距離が極端に縮まった。人間は「人」だけでは成り立たない「文字通り人間という、人と人の間が重要なのである（藤山寛美）」という言葉を思い出す。笑いの極意を極めた芸人の味のある一言である。
- 9) 基本は「人間」であり、個人だけでは社会という集合体は成り立たない。「間」を如何に保ち、維持するか、それも国際交流推進する上での重要な要素である。